

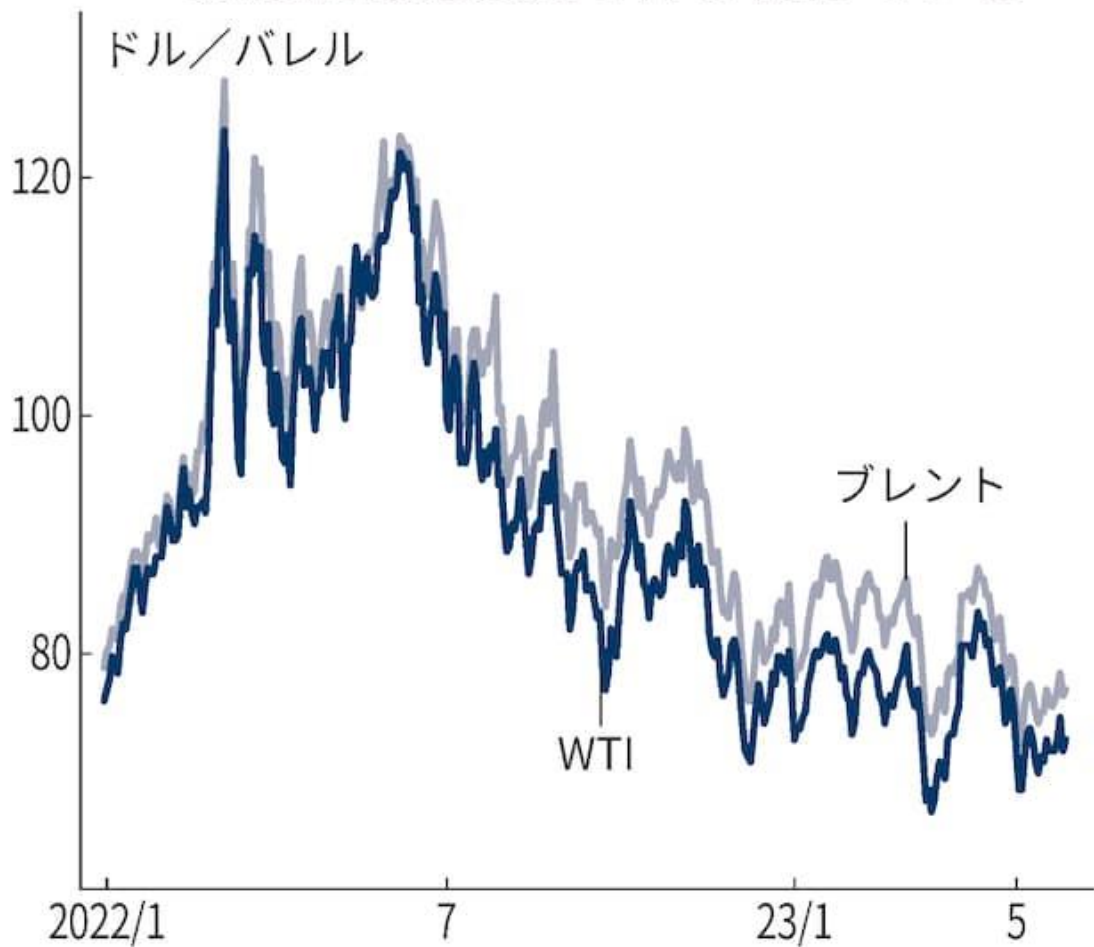


原油、減産姿勢に神経質 サウジやロシアがつばぜり合い

主要産油国でつくる石油輸出国機構（OPEC）プラスの加盟国が追加減産を巡りつばぜり合いを演じている。半年に一度の閣僚級会合を今週末に控え、サウジアラビアは減産を匂わせる一方、アラブ首長国連邦（UAE）やイラクなどは現状維持を示唆。ロシアは追加減産に否定的な姿勢を示す。背景には各国の財政事情や政治的思惑がある。生産の方向性が見えるまで相場は神経質な展開となりそうだ。

サウジなどでつくる OPEC と非加盟のロシアなどが加わる OPEC プラスは 6 月 4 日、閣僚級会合をウィーンで開く。4 月 3 日の合同閣僚監視委員会（JMMC）では、サウジや UAE など 8 カ国が世界需要の 1%にあたる日量 116 万バレルの自主減産を発表。同日の WTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）先物価格は 1 年ぶりの大きさとなる 6%超の上昇率を記録した。

原油価格は足元で伸び悩んでいる



今回合会でも追加減産への警戒感が高まるなか、産油国の姿勢が分かれている。減産に前向きな姿勢をにじませているのが OPEC 盟主のサウジだ。

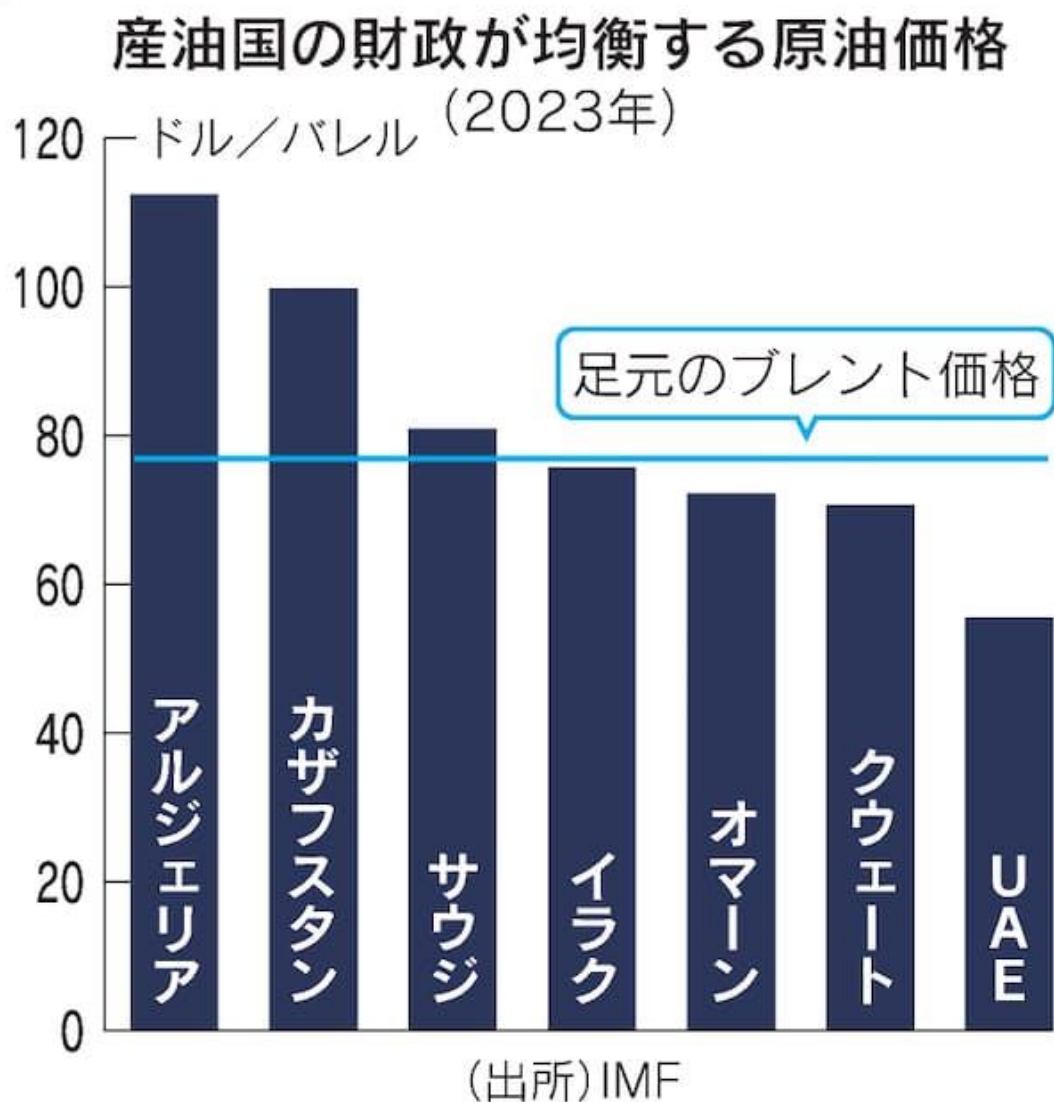
「（追加減産に）気をつける」。サウジのアブドルアジズ・エネルギー相は 23 日、カタールで開かれた経済イベントで、原油価格の下落で利益を得る「空売り」を仕掛ける投機筋にこう警告した。「4 月に（減産発表で）痛い思いをいただろう」とけん制した。

空売り勢は減産で原油価格が上昇すると損失を被る。今回のサウジのけん制を受け、投資家の間では警戒感が高まった。米商品先物取引委員会（CFTC）の週次データによると、

23日時点で投機筋はWTI先物の売りポジションを4月中旬以来6週ぶりに減らした。

WTIも一時1バレルあたり73ドル台と前の日から3%上昇し、約2週間ぶりの高値をつけた。

減産に否定的な産油国も多い。イラクのアブドゥルガニ石油相は12日に「イラクはこれ以上削減できない」と強調したほか、UAEのマズルーイ・エネルギー相も9日、原油価格下落を念頭に「短期的なことは心配していない」と述べた。



温度差の理由の一つには、原油価格が各国財政に与える影響の違いがある。国際通貨基金（IMF）の5月の推計によると、2023年の財政収支が均衡する原油価格はサウジが1バレル80.9ドルに対し、イラクは75.8ドル、UAEは55.6ドル。この価格が低いほど原油価格の下落への耐性が強いといえる。

米国や中国の景気減速への懸念が強まり、足元でWTIは72ドル近辺、北海ブレント先物価格も77ドル近辺に沈む。サウジが減産を示唆したのは均衡価格を下回っているためだ。一方、イラクの均衡価格は足元の水準に近く、UAEは採算が合っている。

政治的な思惑も背景にある。サウジとUAEは多くの利害を共有する密接な関係だが、近年はイスラエルとの国交正常化やイエメン内戦への対応で足並みがそろわず、企業誘致など経済でも競合する動きが出ている。

米国との関係もある。米国は景気下支えやインフレ抑制のため減産による原油価格の上昇は避けたい。サウジは昨年同国を訪れたバイデン米大統領の増産要請に応じず、バイデン政権とのすきま風があらわになった。UAEも兵器調達などで米国に不満を抱いたとみられる場面はあるものの、不一致が表面化する例は比較的少ない。

ロシアのノワク副首相は25日、「（今回の会合で）新たなステップがあるとは思わない」と減産に否定的な姿勢を打ち出し、同日のWTIは一時5%下落した。背景には「米欧の制裁で自国産原油が安くなったことで量を多く輸出する必要がある」（経済産業研究所の藤和彦コンサルティングフェロー）との事情がある。

ロシアは2月に日量50万バレルの減産を始めると表明したにもかかわらず、国際エネルギー機関（IEA）によると3月の減産幅は同29万バレル止まり。4月の海上輸出量を見ても、エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の試算で日量523万バレルと、主要7カ国（G7）が制裁を課した22年12月の450万バレルを超える。割安となった原油を中国やインドなど制裁に加わらない国が積極購入していることで、ロシアの財政が支えられている構図だ。

OPECのガイス事務局長は29日、イラン政府メディアに対し「特定の価格水準を目標としているわけではなく、全ての決定は世界の石油需給のバランスを保つために行われている」と話した。もっとも生産据え置きか追加減産かで各国の思惑は入り乱れ、調整は会合直前まで続く公算が大きい。6月4日まで産油国の動向から目が離せない。

日本経済新聞



2023年 6月 2日 担当 虻川

NY 商品、原油が反発 追加減産の思惑で買い 金は続伸

1日のニューヨーク・マーカンタイル取引所（NYMEX）で原油先物相場は3営業日ぶりに反発した。WTI（ウエスト・テキサス・インターミディエート）で期近の7月物は前日比2.01ドル（3.0%）高の1バレル70.10ドルで取引を終えた。主要産油国が追加減産を決める可能性が市場の一部で意識された。4月にサウジアラビアなどが予想外の追加減産を決め、相場が大幅に上昇した経緯があるため、思惑買いが広がった。

石油輸出国機構（OPEC）加盟国とロシアなど非加盟国で構成する「OPECプラス」は4日閣僚級会合を開く。ロイター通信は関係者の話として「追加減産を決める可能性は低い」と伝えた。だが、中国の経済回復が鈍いとの観測などから、市場では「追加減産の可能性が出てきた」（ストラテジック・エナジー・アンド・エコノミック・リサーチのマイケル・リンチ氏）との声が聞かれた。4月の相場急上昇を踏まえ、持ち高を買いに傾ける動きが広がった。

このところ市場は追加減産を巡って揺れている。サウジのアブドルアジズ・エネルギー相が前週、原油の空売りを仕掛ける投機筋に警告を発したことをきっかけに、減産の思惑が広がった。その後、ロシアのノバク副首相が否定的な見方を示したと伝わっていた。

売りが先行していた米株式相場が上げに転じ、ダウ工業株 30 種平均の上げ幅は 200 ドルを超える場面があった。株式と同様にリスク資産とされる原油先物にも買いが波及した面もあった。

米エネルギー情報局（EIA）が 1 日に発表した週間の石油在庫統計では、原油在庫が市場予想に反して増えた。ただ、夏のドライブシーズンを迎え、ガソリン需要の伸びが見込まれており、相場の反応は乏しかった。

ニューヨーク金先物相場は続伸した。ニューヨーク商品取引所（COMEX）で取引の中心である 8 月物は前日比 13.4 ドル（0.7%）高の 1 トロイオンス 1995.5 ドルで取引を終えた。米長期金利が低下し、金利の付かない資産である金の投資妙味が増すとみた買いが入った。ドルが主要通貨に対して下げたことも、ドルの代替投資先とされる金の先物への買いにつながった。

日経新聞



2023年 6月 2日 担当 虻川

石油統計速報／原油輸入量 1.5%減、中東依存度 95.2%

資源エネルギー庁が5月31日に発表した4月分の石油統計速報によると、原油輸入量は1369万kl（前年同月比1.5%減）と、3か月連続で前年を下回った。

輸入先国は量が多い順にアラブ首長国連邦（577万kl、29.4%増）、サウジアラビア（483万kl、20.9%減）、クウェート（122万kl、16.0%増）、カタール（85万kl、14.1%減）、アメリカ合衆国（29万kl、前年同月実績なし）となっている。

中東依存度は95.2%で、前年同月比1.5ポイント増と4か月連続で前年を上回った。

燃料油の生産は1146万kl（0.5%増）と3か月連続で前年を上回った。油種別にみると、ガソリン及びジェット燃料油は前年同月を上回ったが、ナフサ、灯油、軽油、A重油及びB・C重油は前年同月を下回った。

燃料油の在庫は870万kl（8.5%増）で2か月連続で前年を上回った。油種別にみると、ガソリン、ナフサ、灯油、軽油及びB・C重油は前年同月を上回ったが、ジェット燃料油及びA重油は前年同月を下回った。



ウメモト インフォメーション



2023年 6月 2日 担当 虻川

協和ダンボールのフレキシソ印刷 植物由来のボタニカルインキに切り替え 1年間で約6.16トンのCO2削減

協和ダンボールは6月1日、自社工場内で使用する全ての標準用フレキシソインキを、植物由来成分を含有するボタニカルインキへ切り替えた。

使用するボタニカルインキは、バイオマス（生物資源）の中でも植物由来の材料で、特に二酸化炭素排出量の削減に効果があるとされている。

成分は、樹木や種子などから得られる植物由来成分をインキ固形分中に10%以上を含有。

協和ダンボールでは本社工場・松本工場・安曇野工場で「ボタニカルインキ」を段ボール用インキ（標準用）に採用。これにより、インキ混合色の代表値をもとに計算したところ、3工場合わせて1年間で6.16トンのCO2を削減できる。

協和ダンボールでは、「今後も環境問題へ取り組み、地域・社会に貢献するより良い製品を生産・販売する」としている。

PRINT & PROMOTION



週刊原油処理量 223 万kl

週間原油処理量 223 万kl

2020年6月 以来 2年11カ月ぶり低水準

石連週報

石油連盟がまとめた5月21〜27日の「原油・石油製品供給統計週報」（石連週報）によると、週間原油処理量は223万4497総だった。製油所の定期修理が重なり、新型コロナウイルス感染症拡大初期の2020年6月以来、およそ2年11カ月ぶりの低水準となった。前週を23万5128総（9・5%）、前年同期を49万8416総（18・2%）下回

り、それぞれ3週続けて、7週続けて減少している。常圧蒸留装置の稼働率は、設計能力稼働率が60・3%と前週から6・3ポイント低下。2021年7月以来、約1年10カ月ぶりの低水準をつけた。一方、定期修理や事故などによる稼働停止分を除いた稼働率は88・9%で4・6ポイント上昇した。ガソリンの推定週間出荷量は76万5314総となり、70万総台が3週連続、前年超えが8週連続に伸びている。製品在庫量はガソリンが前週比0・9%減と3週ぶりに減少。前年同期比は2・2%増で2週続けて上回った。中間留分は灯油が前週比2・5%増と2週ぶり、前年同期比は7・0%増と4週連続で超えている。

軽油は前週比が8・2%減で2週続けて、前年同期比は7・5%減で3週続けて割り込んだ。A重油は前週比が3週ぶりにわずかに増加。前年同期比は1・5%減と5週連続で割っている。

◎週間製油所稼働状況
 ▼原油処理量223万4497総（前週比23万5128総減）▼製油所稼働率（対実稼働能力）88・9%（4・6ポイント増）▼同（対設計能力）60・3%（6・3ポイント減）
 ◎石油製品週末在庫量
 ▼ガソリン171万3500総（前週比1万5477総減）▼灯油138万9743総（3万4218総増）▼軽油131万3224総（11万7743総減）▼A重油71万3126総（134総増）▼C重油191万8939総（3万9450総減）▼燃料油計92万9364総（39万6029総減）
 ◎原油・半製品週末在庫量
 ▼原油117万3809総（26万4631総増）▼粗軽油87万7433総（7万4029総減）▼粗A重油48万9332総（1万3274総増）▼計（装置原料含む）638万7895総（11万6305総減）
 ◎石油製品生産量
 ▼ガソリン79万9612総（前週比3万1522総減）▼灯油10万3410総（5万3125総増）▼軽油60万99757総（9643総減）▼A重油17万809総（26万4631総減）▼C重油28万4593総（2万6430総減）▼燃料油計23万1874総（15万2963総減）
 ◎石油製品輸入量
 ▼C重油なし（前週比6209総減）
 ◎石油製品輸出货量
 ▼ガソリン4万975総（前週比4万9598総増）▼ジェット燃料油14万6897総（3万8012総減）▼灯油なし（6670総減）▼軽油13万9697総（6万9645総増）▼A重油なし（増減なし）▼C重油13万2468総（1280総増）▼燃料油計46万8777総（7万5841総増）。